

名詞修飾表現「A の B の C」と非飽和名詞

言語学・応用言語学専門分野
1LT12153W
森田千尋

2012（平成 24）年入学
2016（平成 28）年 1 月提出

要旨

「A の B の C」という名詞句には「1m の横幅の板」、「横幅の 1m の板」のように同じ語を使用していても語順によって容認できるかが変化する。特に非飽和名詞と数詞の組み合わせ、非飽和名詞と人名の組み合わせでは特徴的な現象が見られた。本論文では西山（2003）の「NP₁ の NP₂」の分類に則り、非飽和名詞を含む「A の B の C」について名詞の語順を入れ替えた場合の容認性について調査を行った。その結果、「A の B の C」の中で、先に併合が起こってできる名詞句とその主要語ともう一つの名詞句の併合によってできる名詞句が文法的であるかが「A の B の C」全体の容認性に関係していること、飽和名詞化しない非飽和名詞は文頭に出現しづらいこと、「[数詞+非飽和名詞]+C」の語順で併合する場合は非飽和名詞の前にパラメータの値がなくても容認できることがわかった。

1. はじめに	1
2. 先行研究	2
2.1. タイプ[A] : NP ₁ と関係 R を有する NP ₂	3
2.2. タイプ[B] : NP ₁ デアル NP ₂	5
2.3. タイプ[C] : 時間領域 NP ₁ における NP ₂ の指示対象の断片の固定	6
2.4. タイプ[D] : 非飽和名詞(句)NP ₂ とパラメータの値 NP ₁	7
2.5. タイプ[E] : 行為名詞(句)NP ₂ と項 NP ₁	10
2.6. 問題提起	11
3. 分析と考察	12
3.1. 人名と非飽和名詞を含む「A の B の C」	12
3.2. 数詞と非飽和名詞を含む「A の B の C」	15
3.3. 考察	18
4. まとめ	21
5. 参考文献	22

1. はじめに

名詞句「A の B の C」は、語順が変わると解釈が変わる。解釈は変わるが(1)ではいずれの語順でも容認可能である。

- (1) a. 兄の嫁の先生
b. 兄の先生の嫁
c. 先生の嫁の兄
d. 先生の兄の嫁
e. 嫁の兄の先生
f. 嫁の先生の兄

しかし、名詞句「A の B の C」の中に数量詞が含まれる場合、様々な特徴的な現象が観察される。たとえば(2)や(3)である。

- (2) a. 1m の横幅の板
b. *横幅の 1m の板
c. 横幅の 1m の位置(横幅の全体の長さの中で端から 1m の位置という解釈は可能)
- (3) a. 板の横幅の 1m
b. *位置の横幅の 1m

また、「A の B の C」の中に人名が含まれている場合も異なるパターンが観察される。

- (4) a. 独身のジョンの兄
b. *兄のジョンの独身

特徴的な現象が観察される数量詞及び人名を含む名詞句「A の B の C」について考察を進めていく。

2. 先行研究

西山（2003）は、「NP₁のNP₂」を以下の5つに分類した。

- (5) タイプ[A]：NP₁と関係Rを有するNP₂
 タイプ[B]：NP₁デアルNP₂
 タイプ[C]：時間領域NP₁におけるNP₂の指示対象の断片の固定
 タイプ[D]：非飽和名詞(句)NP₂とパラメータの値NP₁
 タイプ[E]：行為名詞(句)NP₂と項NP₁

(5)より、時間領域を表す名詞句、非飽和名詞句、行為名詞句が「NP₁のNP₂」の分類に大きく関係していることが西山（2003）で指摘されていることがわかる。そこで、NP₁を数詞、時間領域名詞、それ以外の名詞の3種類に分類し、NP₂を非飽和名詞句、行為名詞句、それ以外の名詞の3種類に分類する。さらに、西山（2003）における、タイプ[A]を「の₁」、タイプ[B]を「の₂」、タイプ[C]、[D]、[E]を「の₃」とし、西山（2003）では言及されない、NP₁が数詞でNP₂の数量を表すタイプの「の」を量化の「の」として「の₄」とする。以上のNP₁とNP₂の分類と「NP₁のNP₂」という名詞句の分類を表にまとめると(6)のようになる。

(6)

NP1 \ NP2		非飽和名詞		行為		それ以外	
数詞	属性	50mの ₁ 位置	○	10cmの ₁ 成長	○	160cmの ₁ ジョン	○
		50mの ₂ 横幅	○	—	—	3歳の ₂ ジョン	○
		10mの ₃ 主役	*	5mの ₃ 実験	*	—	—
	数量	3台の ₁ 横幅	○	—	—	5人の ₁ 嵐	○
		—	—	—	—	—	—
		3回の ₃ 優勝者	*	—	—	—	—
		3人の ₄ 主役	○	—	—	3人の ₄ ジョン	○
時間							
それ以外						北海道の ₁ 俳優	○
						北海道出身の ₂ 俳優	○
						—	—
						—	—

(6)ではの₃について、タイプ[C]が出現する組み合わせを緑色、タイプ[D]が出現する組み合わせを青色、タイプ[E]が出現する組み合わせを赤色で示している。

(6)からもわかるように「NP₁のNP₂」の分類は非常に複雑である。そこで西山（2003）をより詳しくまとめる。

2.1. タイプ[A]：NP₁と関係Rを有するNP₂

西山（2003）は、「NP₁のNP₂」という表現において修飾語NP₁が主要語NP₂の限定詞もしくは付加詞となっていて、<前者が後者と関係Rを有する>という意味を持つケースをタイプ[A]としており、以下のような例文をあげている。

- (7) 洋子の首飾り [西山 2003:16,(28)]
 (8) 北海道の俳優 [西山 2003:16,(29)]
 (9) 隣の部屋の音 [西山 2003:16,(30)]

(7)-(9)では、修飾語NP₁で主要語NP₂の集合の部分集合を選択しているケースになっているが、NP₁がNP₂にたいして限定詞の機能を果たすばあいに、つねにNP₁がNP₂の部分集合を選択するケースになるわけではない、ということ(10)-(12)の例をあげて述べている。

- (10) 隣の部屋のあの妙な音 [西山 2003:17,(31)]
 (11) この会社の山田太郎 [西山 2003:17,(32)]
 (12) 二階の彼女 [西山 2003:17,(33)]

この場合、NP₂がどの対象を指すか、誰を指すかは、修飾語NP₁と独立して決めることができ、NP₁は付随的な情報を与えているにすぎないと説明している。このように、(10)-(12)のような名詞句と(7)-(9)のような名詞句の間には制限的かどうか違いがあるが、いずれも<NP₁と関係Rを有するNP₂>という言語的意味を有しており、Rの値はコンテキストにおいて語用論的に補完されるという点で共通しており、(10)-(12)もタイプ[A]に属すると主張している。

西山（2003）は数量詞を含む表現についても議論している。数量詞には二種あり、主要語の表すものの数や量を表現する「数量Q」と、主要語の表すもの自身の性質を述べる「属性Q」がある、とされ、西山（2003）は、「属性Q+の+名詞」がタイプ[B]に属するか考察している。

- (13) a. 2000ccの車

- b. 200 キロの力士
- c. 8 畳の部屋
- d. 1 リットルのびん
- e. 300m の東京タワー
- f. 10 段の階段
- g. 26 度の部屋

[西山 2003:27(67)]

西山 (2003) は「属性 Q+の+名詞」の例として(13)をあげ、これらを(14)では「NP₁ デアル NP₂」という表現に言い替えている。

- (14) a. ?2000cc デアル車
 b. ?200 キロデアル力士
 c. ?8 畳デアル部屋
 d. ?1 リットルデアルびん
 e. ?300m デアル東京タワー
 f. ?10 段デアル階段
 g. ?26 度デアル部屋

[西山 2003:28,(70)]

(14)はやや容認性が落ち、NP₁ は厳密には主要語 NP₂ のもつ属性を直接述べているのではない点を西山 (2003) は指摘している。さらに、この点を明確にするために(15)(16)をあげ、比較している。

- (15) a. その大学生はコレラ患者である。
 b. その運転手は女性である。
 c. その少年は長髪である。
 d. 叔父は医者である。
 e. クラーク君は都立大学生である。

[西山 2003:29,(71)]

- (16) a. その車は 2000cc である。
 b. この力士は 200 キロである。
 c. その部屋は 8 畳である。
 d. そのびんは 1 リットルである。
 e. 東京タワーは 300m である。
 f. あの階段は 10 段である。
 g. この部屋は 26 度である。

[西山 2003:29,(72)]

タイプ[B]の「NP₁の NP₂」は NP₁ が NP₂ について叙述しており、それを明示的に表すと「NP₂ は NP₁ である」という主語-述語関係になると西山 (2003) は述べている。そのため、(15)の各表現はタイプ[B]の表現と密接な関係があるとして、主語は述語の表す属性を直接有していると指摘している。一方、(16)の例において、主語は述語の表す属性を直接有していないと述べ、(16e)おける解釈について、(17)のように多様性のあるものだと指摘している。

- (17) a. 東京タワーは、高さは 300m である。
 b. 東京タワーは、幅は 300m である。
 c. 東京タワーは、バス停からの距離は 300m である。

[西山 2003:30, (73)]

文法で規定できるような文の言語的意味とそれにたいする語用論的解釈は明確に区別すべきであるとして、(16e)について(18)のような表示で規定されるべきである、とした。

- (18) <東京タワーは、R は 300m である>

[西山 2003:30,(74)]

スロット R に何が入るかはコンテキストが与えられてはじめて決まるものであるとして、(16e)は文として意味的に完結していない不完全な文であるとした。

これらのことから、(15)においては、主語は述語の表す属性を直接有していることが文の意味レベルで規定されており、語用論的読み込みは関与していないが、(16)のタイプの文は文の意味レベルでは命題が定まらず語用論的な読み込みを必要とする、と指摘している。西山 (2003) は、(16)と同じように(13)においても、属性 Q と主要語の関係について、語用論的な読み込みが不可欠であると指摘し、「属性 Q は、主要語に帰す性質を把握するための手がかりを与えている」と主張している。したがって、(13)における属性 Q と主要語の関係はコンテキストに照らして、スロット R の中身を補完する必要があるという点でタイプ[A]とみなすべきであるとした。

2.2. タイプ[B] : NP₁ デアル NP₂

タイプ[B]の例として西山 (2003) は次の例をあげている。

- (19) コレラ患者の大学生 [西山 2003:19,(36)]
 (20) ピアニストの政治家 [西山 2003:19,(37)]
 (21) 北海道出身の俳優 [西山 2003:19,(38)]

これらは、修飾語 NP₁ が主要語 NP₂ の付加詞となっている点ではタイプ[A]と共通している

が、 $\langle NP_1$ と関係 R を有する $NP_2 \rangle$ という関係は成立しておらず、 NP_1 と NP_2 のあいだには「 NP_1 が叙述的な意味を表し、 NP_2 がその叙述があてはまる対象である」意味的緊張関係が成立していると西山（2003）は主張している。このとき、「 NP_1 の」は、構造的には「 NP_1 +連体助詞ノ」ではなく「 NP_1 デアル」という叙述を伴う関係節としての連体修飾節をなしていると指摘している。つまり、(19)-(21)はそれぞれ「 x はコレラ患者である」「 x はピアニストである」「 x は北海道出身である」のような空所があり、主要語 NP_2 がその空所を埋めるという関係が成立している。ここで、西山（2003）は例として、(21)とタイプ[A]の(8)の二つを比較している。

(8) 北海道の俳優 [西山 2003:16,(29)]

(8)のひとつの解釈は(21)と同じものであるが、(8)はそれ以外に多様な解釈が可能である。それにたいし、(21)は<北海道出身デアル俳優>以外の解釈が不可能である。このことからわかるように、タイプ[B]の解釈に関しては、意味論的に完結しているので語用論が侵入する余地がないと指摘している。

2.3. タイプ[C]：時間領域 NP_1 における NP_2 の指示対象の断片の固定

西山（2003）は、 NP_1 が特定の時間領域を表し、 NP_2 の指示対象をその領域の中で固定するケースをタイプ[C]とする。次の例がこのケースにあてはまるとしている。

- (22) 東京オリンピック当時の君 [西山 2003:31,(76)]
 (23) 着物を着た時の洋子 [西山 2003:31,(77)]
 (24) 大正末期の東京 [西山 2003:31,(78)]

このばあい、 NP_2 は聞き手がその対象を同定できる「定指示の名詞句」であると指摘している。その点でタイプ[A]の(10)(11)(12)と類似しているが、(10)-(12)のばあい NP_1 は NP_2 にたいして付随的な説明を与えるものであり、非制限的な修飾語であったが、(22)-(24)のばあいは、 NP_1 は NP_2 にたいしてある限定を与えているという意味では制限的な修飾語であるとして、次の例をあげている。

- (25) a. 大正末期の東京では瓦葺きの家が多い。
 b. 東京では瓦葺きの家が多い。 [西山 2003:32,(80)]
 (26) a. 着物を着た時の洋子は素敵だ。
 b. 洋子は素敵だ。 [西山 2003:32,(81)]

一般に、非制限的な修飾のばあいは、修飾節を取り除いても文意は大きく変わらないはずだが、(25a)と(25b)、(26a)と(26b)とは文意が大きく変わることを指摘している。

西山（2003）はこの種の名詞句の特徴が、限定の与え方の特殊性にあるとし、(22)-(24)のばあい、 NP_1 が時間上の特定の位置を指示し、 NP_2 の指示対象の時間の流れのなかで、その時間上の位置を占めているかぎりの断片を切り取っているのである、と主張している。

また、(27)のように NP_1 が空間領域を表すばあいは、「飛行機操縦席にいる時の鈴木さん」と意味するとできるため、タイプ[C]に属すると述べている。

(27) 飛行機操縦席の鈴木さん [西山 2003:32,(82)]

2.4. タイプ[D]：非飽和名詞(句) NP_2 とパラメータの値 NP_1

西山（2003）は、タイプ[D]の例として次のような例をあげている。

- (28) この芝居の主役 [西山 2003:33,(84)]
 (29) 第14回ショパン・コンクールの優勝者 [西山 2003:33,(85)]
 (30) 太郎の上司 [西山 2003:33,(86)]
 (31) この大学の創立者 [西山 2003:33,(87)]
 (32) 『源氏物語』の作者 [西山 2003:33,(88)]
 (33) 生成文法理論の研究者 [西山 2003:33,(89)]
 (34) 自由民主党の幹部 [西山 2003:33,(90)]
 (35) 洋子の相手 [西山 2003:33,(91)]
 (36) あの本の表紙 [西山 2003:33,(92)]

西山（2003）は、これらの名詞句において NP_2 の N には共通の特徴があるとし、例として「主役」をとりあげて説明している。あるひとについて、そのひとが主役であるかどうかは、どの芝居(や映画)を問題にしているかを定めなにかぎりなんともいえないことから、「主役」は「 X の」というパラメータの値が定まらないかぎり、それ単独では外延を決めることができず、意味的に充足していない名詞であると主張している。西山(1990)はこのようなタイプの名詞を「非飽和名詞」と呼び、その特徴は、かならず「 X の」というパラメータを要求し、パラメータの値が定まらないかぎり意味として完結しないことであると述べている。西山（2003）は、「恋人」「友達」のような関係語や「妹」「母」「叔父」「息子」のような親族語は「 X の」というパラメータを要請するため、非飽和名詞に含まれると指摘している。

一方、(21)に登場する「俳優」という語の意味は<芝居や映画で演技をすることを職業とするひと>であり、あるひとについて、そのひとが俳優であるかどうかを問題にするこ

とは原理的に可能であると西山（2003）は指摘している。西山(1990)は、「俳優」のタイプの名詞を飽和名詞と呼び、その特徴はパラメータが関与せず、それ自体で意味が充足しており、ある対象がその名詞の属性を満たすかどうか自立的に定めることができることだとしている。(28)における「主役」は非飽和名詞であって、修飾語「この芝居」は主要後「主役」のパラメータの値を表しており、全体は<この芝居で主役をつとめるひと>というひとまとまりの意味を表している。西山（2003）はこのばあい、「この芝居」は「主役」の集合のなかから部分集合を選択する機能を果たしているわけではないことを指摘している。

西山（2003）は、(28)-(36)にみられる、非飽和名詞 NP₂とそのパラメータの値 NP₁の関係が成立する「NP₁のNP₂」をタイプ[D]としている。

西山（2003）は「飽和名詞」と「非飽和名詞」という観点で例文を考察し、タイプ[A]、タイプ[B]、タイプ[C]における NP₂に出現した名詞は飽和名詞であることを指摘し、次の二つの表現を用いて、飽和名詞と非飽和名詞の違いを考察した。

- (21) 北海道出身の俳優 [西山 2003:19,(38)]
 (28) この芝居の役者 [西山 2003:33,(84)]

西山（2003）は、(21)において、「北海道出身」は、飽和名詞であり独立に定まっている「俳優」の外延をさらに限定するはたらきをしているにすぎず、俳優の集合と北海道出身者の集合との共通部分集合を取り出す作業をしている、と指摘している。その点で飽和名詞 NP₂と修飾要素 NP₁との関係は「外延同士の限定」であり、「外的な結びつき」であると主張する。一方、(28)のばあいは、非飽和名詞「主役」は「芝居 X の」というパラメータの値が設定されないかぎり外延が定まらないため、非飽和名詞「主役」と修飾要素「この芝居」の関係は「内的な結びつき」であると主張している。

次に、西山（2003）は(21)と(28)をコンピュータ文¹の述語の位置に置いた例で飽和名詞と非飽和名詞を比較している。

- (37) 田中太郎は、北海道出身の俳優である。 [西山 2003:35,(93)]
 (38) 田中太郎は、この芝居の主役である。 [西山 2003:35,(94)]

西山（2003）は、(37)は田中太郎について、(i)「北海道出身者」(ii)「俳優」という二つの属性を帰していることを指摘し、(38)は田中太郎について、(i)「この芝居」(ii)「主役」という二つの属性を有しているのではなく、「この芝居の主役」という単一の属性を帰して

¹ 「A は B だ」(A is B)のような文のことをコンピュータ文という

いることを指摘している。

さらに、次のような例もあげている。

- (39) a. 甲：この芝居の主役は誰(=どの人)だ。
 b. 乙：田中太郎がこの芝居の主役だ。 [西山 2003:36,(95)]

(39a)は、誰が「この芝居の主役」という条件を満たすひとであるか尋ねているコンピュータ文で「倒置指定文」と呼ばれるものであり、それにたいする応答(39b)は田中太郎が条件を満たすひとであると述べる「指定文」と呼ばれるものである。西山（2003）は(39)の「この芝居」を主題化して、次のような文を構築しても実質的な意味は変わらない、と指摘している。

- (40) a. 甲：この芝居は、主役は誰だ。
 b. 乙：この芝居は、田中太郎が主役だ。 [西山 2003:36,(96)]

(40b)のような文は「カキ料理構文」²と呼ばれるものである。次のような例があげられ、(39)、(40)と比較されている。

- (41) a. 甲：文学座の俳優は誰だ。
 b. 乙：田中太郎が文学座の俳優だ。 [西山 2003:37,(97)]

(41a)は、誰が「文学座の俳優」という条件を満たすひとであるかを尋ねる倒置指定文であり、(41b)は田中太郎が「文学座の俳優」という条件を満たすひとだと述べる指定文である。このように(39)と(41)は形式上平行していると思われるが、(41)の「文学座」を主題化した(42)のような言い方は許されないことを指摘している。

- (42) a. ?甲：文学座は、俳優は誰だ。
 b. ?乙：文学座は、田中太郎が俳優だ。 [西山 2003:37,(98)]

西山(1990)は、(40)のように(39)の「この芝居」を主題化しても大きく意味が変わらないのは、「主役」と「この芝居」との関係が、非飽和名詞とそのパラメータの値の関係になっ

² 西山(1990)では、「広島が、カキ料理の本場だ。」という例文と、「カキ料理は、広島が本場だ」という例文を用いて飽和名詞句と非飽和名詞句について論じている。そのため、(40)のような「カキ料理は、広島が本場だ」と同じ形の「(パラメータの値)は、(名詞句)が(非飽和名詞句)だ」という文を「カキ料理構文」とよぶ。

ているばあいに限られることを指摘した。

ここまで、飽和名詞と非飽和名詞の違いについて見てきたが、両方の解釈を許す名詞も存在する、と西山（2003）は主張している。例として「子供」という表現をあげ、＜大人にたいする子供＞の意味であれば飽和名詞であるが、＜親にたいする子＞の意味であれば非飽和名詞であると説明している。

西山（2003）は飽和名詞と非飽和名詞を区別する際の注意点を四つあげている。

- (43) この区別は純粋に意味的なものであり、文法のレベルで規定されている。
- (44) 意味論的には非飽和名詞である表現でも、そのパラメータの値がコンテキストから適切に補充されていると理解されれば、飽和化した名詞として解釈されうる。
- (45) タイプ[D]の「NP₁のNP₂」において、個々のNP₂はそれが要求する可能なパラメータにたいして意味的な制約を課している。
- (46) 非飽和名詞は、意味上、対応する動詞が存在するばあいが少なくない。

西山（2003）は、(46)について「優勝者」「創立者」「作者」がそれぞれ「優勝する」「創立する」「執筆する」という動詞と対応する例であるとしてあげているが、「主役」「妹」「叔父」のように動詞と直接の対応関係を持たない非飽和名詞もあることを指摘している。

2.5. タイプ[E]：行為名詞(句)NP₂と項NP₁

西山（2003）は、修飾語NP₁が主要語NP₂の補語になっているケースとして、次のような例をあげている。

- | | | | |
|------|----------|---------------|--------------------|
| (47) | 物理学の研究 | (←物理学を研究する) | [西山 2003:40,(110)] |
| (48) | この町の破壊 | (←この町を破壊する) | [西山 2003:40,(111)] |
| (49) | パスポートの紛失 | (←パスポートを紛失する) | [西山 2003:40,(112)] |
| (50) | 軍隊の放棄 | (←軍隊を放棄する) | [西山 2003:40,(113)] |
| (51) | 夜間外出の禁止 | (←夜間外出を禁止する) | [西山 2003:40,(114)] |

これらの名詞句の主要語NP₂のNはいずれも漢語サ変動詞系名詞であり、西山（2003）はこの種の名詞を「行為名詞」と呼んでいる。行為名詞は「～する」を付すことによって対応する動詞を構築することができる特殊な名詞であり、対応する動詞と同じ項構造をもつ、とされる。西山（2003）は、NP₂が行為名詞であり、NP₁がNP₂の項を埋めているケースをタイプ[E]とした。タイプ[E]のばあい、修飾語NP₁と主要語NP₂のあいだの関係が不明瞭であることはない、と西山（2003）は主張する。

2.6. 問題提起

ここまで、西山（2003）における「NP₁のNP₂」の分類について見てきた。西山（2003）では「AのBのC」については考察されていない。

本論文では、横幅や兄のような非飽和名詞を含む「AのBのC」について考察を進める。

3. 分析と考察

3.1. 人名と非飽和名詞を含む「A の B の C」

西山 (2003) の「NP₁の NP₂」の分類についてここからは(52)のように表すとする。

- (52) の₁: タイプ[A]NP₁と関係 R を有する NP₂
 の₂: タイプ[B]NP₁ デアル NP₂
 の₃: タイプ[D]非飽和名詞(句)NP₂t パラメータの値 NP₁

(53)(54)のような、人名と非飽和名詞を含む名詞句「A の B の C」について考察する。
 (53a)(54a)のような語順では容認されるが、(53b)(54b)の語順では容認されない。

- (53) 独身、兄、ジョン
 a. 独身の兄のジョン
 b. ?ジョンの兄の独身 (悪口のような意味では容認可能)
- (54) 努力家、兄、ジョン
 a. 努力家の兄のジョン
 b. *ジョンの兄の努力家

(53)(54)の名詞句のうち二つを取り出して「NP₁の NP₂」という形にした場合、容認される NP₁と NP₂の組み合わせと、容認される組み合わせがどの分類になるか(52)を用いて表したものは(55)(56)の表の通りである。

(55)

		独身 兄 ジョン			
		NP2	独身	兄	ジョン
NP1		独身	—	—	—
独身		—	独身の ₂ 兄	独身の ₂ ジョン	—
兄		*	—	兄の ₂ ジョン	—
ジョン		*	—	ジョンの ₃ 兄	—

(56)

		努力家 兄 ジョン			
		NP2	努力家	兄	ジョン
NP1		努力家	—	—	—
努力家		—	努力家の ₂ 兄	努力家の ₂ ジョン	—
兄		*	—	兄の ₂ ジョン	—
ジョン		*	—	ジョンの ₃ 兄	—

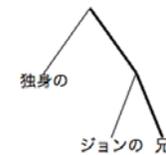
(55)(56)より、各組み合わせにあてはまる「NP₁の NP₂」の分類は一種類であること、NP₂には独身や努力家のような名詞は出現しないことがわかる。

次に(53)(54)の名詞句について「A の B の C」とした場合について考察する。「A の B の C」の最初に併合する部分を[]で表すとする。このとき[]内の容認性と、[]の主要語と[]外の名詞句を組み合わせた「NP₁の NP₂」の容認性が名詞句全体の容認性に関係していることが考えられる。(57)を例としてみていく。

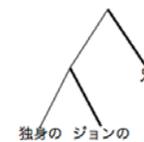
- (57) 独身のジョンの兄

(57)の構造として(58)(59)があげられる。

(58)



(59)



(58)は「独身の[ジョンの兄]」と表すことができる。まず、[]内の「ジョンの兄」について考える。このとき(55)を参照すると、「ジョンの兄」はの₃として容認されることがわかる。次に[]の主要語と[]外にある名詞句の組み合わせについて考える。名詞句「NP₁のNP₂」において主要語はNP₂である。そこで[]内のNP₂にあたる名詞句と[]外にある名詞句の組み合わせについて容認性を考える。(58)においては「独身の兄」の容認性について考える。(55)を参照すると「独身の兄」はの₂として容認されることがわかる。(59)は「[独身のジョン]の兄」と表すことができる。この場合、(55)を参照すると、[]内の「独身のジョン」はの₂として容認され、[]内の主要語と[]外の名詞句にあたる「ジョンの兄」はの₃として容認されることがわかる。そこで(58)は(60)のように、(59)は(61)のように表すとする。

(60) 独身の₂[ジョンの₃兄]

(61) [独身の₂ジョン]の₃兄

(53)(54)にあげた名詞句について、すべての語順を考察する。名詞句の構造、全体が容認できるか、[]内が容認できるか、[]内の主要語と[]外の名詞句が併合して容認できるかをまとめた表が(62)(63)である。全体を容認できるものは青、容認できないものは赤で示している。

(62)

独身 兄 ジョン

全体	[]内	[]外	例文	備考
独身の ₂ [兄の ₃ ジョン]			独身の兄のジョンが結婚相手を探している	
[独身の ₂ 兄]の ₃ ジョン			独身の兄のジョンは今年30歳をむかえる	
独身の ₂ [ジョンの ₃ 兄]			独身のジョンの兄はお見合いに行った	独身なのはジョンの兄
[独身の ₂ ジョン]の ₃ 兄			独身のジョンの兄には綺麗な奥さんがいる	独身なのはジョン
ジョンの ₃ [独身の ₂ 兄]			ジョンの独身の兄は警察官だ	
* [ジョンの独身]の兄	*			
* ジョンの[兄の独身]		*		悪口のような意味では容認できる
* [ジョンの兄]の独身	*			
* 兄の[ジョンの独身]	*	*		悪口のような意味では容認できる
* [兄のジョン]の独身		*		
兄の ₂ [独身の ₃ ジョン]			兄の独身のジョンは優柔不断だ	
* [兄の独身]のジョン	*			

(63)

努力家 兄 ジョン

全体	[]内	[]外	例文	備考
努力家の ₂ [兄の ₃ ジョン]			努力家の兄のジョンは弁護士になった	
[努力家の ₂ 兄]の ₃ ジョン			努力家の兄のジョンが体を壊した	
努力家の ₂ [ジョンの ₃ 兄]			努力家のジョンの兄は検察官になった	努力家なのはジョンの兄
[努力家の ₂ ジョン]の ₃ 兄			努力家のジョンの兄は怠け者だ	努力家なのはジョン
ジョンの ₃ [努力家の ₂ 兄]			ジョンの努力家の兄は警察官だ	
* [ジョンの努力家]の兄	*			
* ジョンの[兄の努力家]		*		
* [ジョンの兄]の努力家	*	*		
* 兄の[ジョンの努力家]		*		
* 兄の[ジョンの努力家]	*	*		
兄の ₂ [努力家の ₃ ジョン]			大学に行ったのは兄の努力家のジョンだけだ	
* [兄の努力家]のジョン	*			

(62)(63)を見れば明らかのように、[]内が容認できないもの、[]内の主要語と[]外の名詞句が併合しても容認できないものについては、「A の B の C」全体についても容認できない。

3.2. 数詞と非飽和名詞を含む「A の B の C」

(64)(65)のような、数詞と非飽和名詞を含む名詞句「A の B の C」について考察する。(64)では、(64a)は容認されるが(64b)は容認されない。一方(65)では、同じような語順であるにもかかわらず(65a)は容認されず(65b)は容認できる。

(64) 1m、*横幅*、*板*

- a. 1m の横幅の板
- b. *横幅の 1m の板

(65) 1m、*横幅*、*位置*

- a. *1m の横幅の位置
- b. 横幅の 1m の位置

(64)(65)の名詞句のうち二つを取り出して「NP₁のNP₂」という形にした場合、容認されるNP₁とNP₂の組み合わせと、容認される組み合わせがどの分類になるか(52)を用いて表したものは(66)(67)のようになる。

(66)

NP2 \ NP1	1m	横幅	板
1m	—	—	—
横幅	横幅の ₁ 1m 横幅の ₂ 1m —	— 1mの ₂ 横幅 —	1mの ₁ 板 — —
板	— — —	— — 板の ₃ 横幅	— — —

(67)

NP2 \ NP1	1m	横幅	位置
1m	—	—	—
横幅	横幅の ₁ 1m 横幅の ₂ 1m —	— 1mの ₂ 横幅 —	1mの ₁ 位置 — —
位置	— — —	— — —	— — —

(66)(67)いずれも「横幅の 1m」について二つの分類が考えられる。一つ目の分類は「横幅の 1m」を「横幅全体の中の 1m」と解釈する「横幅の₁1m」である。このとき、横幅 > 1m である。二つ目の分類は「横幅の 1m」を「横幅デュアル 1m」と解釈する「横幅の₂1m」である。このとき、横幅 = 1m である。

次に(64)(65)の名詞句について「A の B の C」とした場合について考察する。「A の B の C」の最初に併合する部分を[]で表すとする。この場合も[]内の容認性と、[]の主要語と[]外の名詞句を組み合わせた「NP₁ の NP₂」の容認性が名詞句全体の容認性に関係していることが考えられる。(64)(65)にあげた名詞句についてすべての語順を考察する。名詞句の構造、全体が容認できるか、[]内が容認できるか、[]内の主要語と[]外の名詞句が併合

して容認できるかをまとめた表が(68)である。全体を容認できるものは青、容認できないものは赤、意味は理解できるが違和感のあるものを緑で表している。

(68)

全体	[]内	[]外	例文	備考
* 1mの[横幅の板]	*			
[1mの ₂ 横幅]の ₂ 板	*		1mの横幅の板を持ってきてください	
? 1mの[板の ₃ 横幅]			3mでは無理だが1mの板の横幅なら大丈夫だ	1mなのは横幅
[1mの ₁ 板]の ₂ 横幅			1mの板の横幅はどれくらいですか	1mなのは横幅以外
板の ₁ [横幅の ₁ 1m]			板の横幅の1mは赤で塗ってください	板の横幅全体の長さは1mより長い
[板の ₃ 横幅]の ₂ 1m			板の横幅の1mが通らない	板の横幅全体の長さは1m
? 板の ₃ [1mの ₂ 横幅]			板の1mの横幅が大切だ	
* [板の1m]の横幅				
* 横幅の[1m]の板	*			
* [横幅の1m]の板				
* 横幅の[板の1m]				
* [横幅の板]の1m	*			

(69)

全体	[]内	[]外	例文	備考
* 1mの[位置の横幅]	*			
[1mの ₁ 位置]の ₂ 横幅	*		1mの位置の横幅を測ってください	
* 1mの[横幅の位置]	*			
? [1mの ₂ 横幅]の ₃ 位置	*		1mの横幅の位置を覚えておいてください	
* 横幅の[位置の1m]	*			
* [横幅の位置]の1m	*			
* 横幅の[1m]の位置	*			
[横幅の ₁ 1m]の ₂ 位置			横幅の1mの位置に印をつけてください	横幅は1mより長い
* 位置の[1m]の横幅	*			
* [位置の1m]の横幅	*			
* 位置の[横幅の1m]	*			
* [位置の横幅]の1m	*			

(68)(69)では(62)(63)とは異なる部分が観察され、[]内の主要語と[]外の名詞句が併合しても容認できないものについても容認できることがある。また、(68)については[]内が容認でき、[]内の主要語と[]外の名詞句が併合して容認できるものでも、名詞句全体としては容認できないものが出現している。

3.3. 考察

(62)(63)を見れば明らかなように、[]内が容認できない場合と、[]内の主要語と[]外の名詞句が併合しても容認できない場合の「AのBのC」という名詞句は容認ができない。しかし、(62)(63)と(68)(69)では異なる結果が観察された。そのような現象が観察された理由について考察する。

その一つ目の要因は非飽和名詞が飽和名詞としても出現することができるかどうかであると考えられる。(70)は(55)(56)に、(71)は(66)(67)に出現する例文である。

- (70) a. ジョンの₃兄
b. 兄の₂ジョン
- (71) a. 板の₃横幅
b. *横幅の板

(70a)において「兄」は非飽和名詞であり、「ジョン」は「兄」のパラメータの値として機能している。つまり、(70a)において「ジョン」と「兄」は別人である。一方、(70b)の解釈は「兄デアルジョン」であり、兄=ジョンである。このとき、(70b)内において「兄」は飽和名詞である。(70b)の場合、文脈において発話者が「兄」のパラメータの値として機能していると考えられる。(62)(63)で「兄」が飽和名詞として出現しているのは(72)にあげた例である。

- (72) a. 独身の₂[兄の₂ジョン]
b. [独身の₂兄]の₂ジョン
c. 兄の₂[独身の₂ジョン]
d. 努力家の₂[兄の₂ジョン]
e. [努力家の₂兄]の₂ジョン
f. 兄の₂[努力家の₂ジョン]

(71a)において「横幅」は非飽和名詞であり、「板」は「横幅」のパラメータの値として機能している。(71b)では「横幅デアル板」とは解釈しにくく、文脈の中で「横幅」のパラメータの値を補填することは難しいと考えられる。以上のことから「横幅」は飽和名詞として出現することが兄と比較して難しいと言える。

二つ目の要因として、非飽和名詞がパラメータの値となりうる名詞句よりも前の位置に出現していることが考えられる[]内が容認でき、[]内の主要語と[]外の名詞句が併合して容認できるものでも、名詞句全体としては容認できないものに(73a)(73b)がある。

- (73) a. *[横幅の1m]の板
b. *横幅の[板の1m]
c. [横幅の₁1m]の₃位置

(73a)は(66)の表を参照すると、[]内の「横幅の1m」と、[]内の主要語と[]外の名詞句が併合した「1mの板」は、容認できるが名詞句全体では容認されない。同様に(73b)も(66)を参照すると、[]内の「板の1m」と、[]内の主要語と[]外の名詞句「横幅の1m」は容認できるが名詞句全体では容認されない。しかし、(73c)は(67)を参照すると、[]内の「横幅の1m」と、[]内の主要語と[]外の名詞句「1mの位置」はそれぞれ容認することができ、名詞句全体としても容認できる。そこで、(73a)(73b)の名詞句全体をみると、パラメータの値となりうる名詞句「板」が、「横幅」という非飽和名詞句より後の位置に出現していることがわかる。西山(2003)のタイプ[D]において、非飽和名詞句はNP₂に、パラメータの値となる名詞句はNP₁に出現していることがわかる。つまり、非飽和名詞句のパラメータの値となる名詞句は、非飽和名詞句よりも前の位置に出現しているのである。このことから(73)では、非飽和名詞句「横幅の」パラメータを満たす機能をもつ「板」という名詞句が、「横幅」のパラメータの値として機能する位置にないことで容認不可能になったと考えられる。(73c)では「位置」という名詞句が「横幅」という非飽和名詞句のパラメータの値となりえないため、「横幅」という非飽和名詞句が「位置」という名詞句よりも前の位置に出現することができると考えられる。

一方、「板」が「横幅」のパラメータとして機能していなくても容認できるのが(74)である。

- (74) [1mの₂横幅]の₂板

(74)では[]内の主要語と[]外の名詞句が併合した「横幅の板」は容認できないにもかかわらず、数詞と非飽和名詞が併合することにより、「1mの横幅デアル板」という解釈が可能になっている。これと同じ現象は(75)にも観察できる。

- (75) a. [1mの₁位置]の₃横幅
b. ?[1mの₂横幅]の₃位置

以上より次のような特徴が考えられる。

- (76) 「AのBのC」について、非飽和名詞句とそのパラメータの値となりうる名詞句が含まれている場合、非飽和名詞句がパラメータの値となりうる名詞句より前の位置

に出現することはできない。しかし、「[数詞+の+非飽和名詞]+の+名詞句」という形であれば、非飽和名詞のパラメータの値が満たされていなくても容認できる。

4. まとめ

本論文では、西山（2003）に基づき非飽和名詞を含む「A の B の C」について考察を進めてきた。これまでの考察を以下のようにまとめる。

- (77) 「A の B の C」は「[_αA の B]の C」という場合と「A の[_αB の C]」という場合があるが、 α の部分が文法的であり、 α の主要語と α の外にある名詞句が併合したものが文法的でなければ容認できない。
- (78) 「A の B の C」において、非飽和名詞はパラメータの値を「A の B の C」内に必要とするため、文頭にくることは少ない。しかし、文脈によってパラメータの値が満たされていることもあり、その場合に非飽和名詞は「A の B の C」内で飽和名詞として機能するため、文頭にくることもある。
- (79) 「A の B の C」について、非飽和名詞句とそのパラメータの値となりうる名詞句が含まれている場合、非飽和名詞句がパラメータの値となりうる名詞句より前の位置に出現することはできない。しかし、「[数詞+の+非飽和名詞]+の+名詞句」という形であれば、非飽和名詞のパラメータの値がタイプ[D]の位置で満たされていなくても容認できる。

5. 参考文献

- 西山佑司（1990）「「カキ料理は広島が本場だ」構文について--飽和名詞句と非飽和名詞句」
『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』22:168-188
- 西山佑司（2003）『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』,日本語研究叢書第3期第2巻.東京：ひつじ書房